第38回「東書教育賞」の審査を終えて

審査委員長 **市川 伸一**

東書教育賞は、コロナ禍もなかなか終息しない中、今年度も130編という非常に多くの応募をいただきました。審査委員長として深く感謝いたします。

論文の一般的傾向として、ひところは、学習指導要領改訂の影響もあって、「社会に開かれた教育課程」や「主体的・対話的で深い学び」などをタイトルに入れたものが目立ったのですが、今年度は教科学習の本質に迫り、かつ新しい、ユニークな実践が多く見られたと思っております。

いくつかの例を挙げさせていただきますと、小学校部門で、最優秀賞となった岡山県岡山市立芳明小学校の中安翼先生の「性別・技能・言語の壁を越えろ！　パラスポーツを活用した体育授業」という論文があります。運動が苦手な児童、男女いっしょに運動することへの抵抗感のある児童、外国籍で言語の壁のある児童などが見られるというのが中安先生の問題意識でした。そこで、ボッチャ、ゴールボールなどのパラスポーツを取り入れることで、これまで以上に生き生きと取り組む姿が見られ、異質な他者との交流も起こるようになったという実践です。

同じく小学校の奨励賞には、茨城県牛久市立中根小学校の佐野一葉先生の「外国語科における話す意欲を高める方略的能力の育成」という論文があります。近年の外国語教育ではコミュニケーション重視が言われているものの、実際には、やりとりに消極的な児童が多くいます。そこで、会話をうまくつなぐための方法として、「方略的能力」に注目されました。あいづちを打つ言葉を知る、単語を知らないときは言い換える、何か相手が述べたときに質問を入れるとか、小学校ではあまり直接的に教えられていないことですが、簡単な会話や即興的なプレゼンテーションを通じて、小学校６年生の児童に３か月間の継続的実践を行うことで、意欲の向上や発話量の増大が見られたということです。

中学校部門の優秀賞に、上越教育大学附属中学校の仙田健一先生による「身近な地域の魅力に気付き、誇りをもつ生徒を育成する社会科授業」があります。これまで、地域の社会的問題をテーマにするとき、少子高齢化、過疎化、地方政治といった問題が取り上げられることは多くありました。しかし、もっと地域への愛着や誇り、地域の一員としての自覚を促すような授業を構想し、市内の「高田本町百年商店街」でのフィールドワークを課題にしました。ここの「絵看板」に着目した調査を中心に、いくつかのミッションを求めます。インタビュー、歴史的史料の閲覧、ネット検索などを行っていくうちに、地域の魅力や課題意識が高まる様子が見られたというものです。

同じく奨励賞に、岡山大学教育学部附属中学校の川上祥子先生の「持続可能な社会の構築を目指す『サルベージ・パーティ®』の実践」とい

う家庭科の授業があります。テーマは食品ロスの解消ということで、「サルベージ・パーティ®」というのは、家庭にある余りそうな食材を「救い出す」ということです。皆で持ち寄って、使い切るように料理を作るのですが、その際、食品バランス、家族の好みなどにも配慮します。川上先生は、カリキュラム・マネジメントとして、家庭科内の領域をつなぐことや他教科等とつなぐことはもとより、学校での学びと実生活をつなぐことも大切にしたいと述べています。そのため、長期休暇での家庭生活にも結びつけるようにもしており、提出レポートやアンケートなどから高い成果が見られています。

これらは、いくつかの例ですが、全体として、問題意識が鮮明で、ユニークな実践が多いこと、さまざまな方法で成果の検証を試みている様子がわかります。こうした方法は、いま学校教育で大きな課題となっている「学習評価」のしかたにもつながるものです。これからの東書教育賞の指針ともなる優れた論文が多く見られたことを大変うれしく思いますし、お読みになった方の今後の実践にもぜひ活かしていただけることを期待しております。

ICTに関わる論文の総評

審査委員 **赤堀 侃司**

私は、ICT部門で審査をさせていただいた赤堀と申します。ICT部門に、今年も多くの論文が投稿され、審査委員として大変うれしく思いました。

最初は小学校部門で優秀賞を受賞された、和歌山大学教育学部附属小学校の北川真里菜先生です。この論文で最も印象に残ったことは、子ども一人一人の特性に応じた授業を実践されたことです。小学校の音楽づくりの授業ですが、通常は楽器を用いて、演奏しながら音楽づくりをします。子どもたちの中には、楽器を演奏することが苦手な子どももいます。しかし、音楽づくりを楽しむこと、その仕組みを学ぶこと、それはどの子どもにも必要です。そこで北川先生が導入したのは、プログラミングによる曲づくりと音楽制作ソフトの活用です。つまり、子どもたちに、楽器か、プログラミングか、ソフトか、を選ばせるのです。もし私が小学生だったら、たぶん楽器演奏は難しすぎて、できないでしょう。このように、いくつかの道具や方法が提示されれば、自分に合った道具を選び、そこに触れて音楽の時間を楽しむことができるはずです。「個別最適化」とは、子どもの学びに対して、その子に合った道具や方法を提供していくことだと気づかせてもらいました。優れた論文として評価いたしました。

同じく小学校部門で奨励賞を受賞されたのは、和歌山県有田川町立鳥屋城小学校の坂本利文

先生です。この論文に感銘を受けたのは、少子化・過疎化で悩む地域において、オンラインを有効活用することで、先生方のスキルアップを実現したことです。少子化が進めば学校は小規模になり、同時に先生方の数も少なくなりますので、若い先生はベテランの先生から、授業の進め方、学年会の持ち方、保護者への対応など、相談することができないのです。そこで、坂本先生は、オンラインを使って町内の全ての学校の先生方が相談できるように、先輩と後輩が知恵を出し合うような仕組みを作ったのです。それは、少子化・過疎化にさらされている多くの地域の教員にとって、福音になるような実践ではないかと感じて、評価いたしました。

最後は、中学校部門で優秀賞を受賞された、岩手県一関市立花泉中学校の奥田昌夫先生です。奥田先生の凄さは、まるでプロ並みのアプリの教材開発をされたことです。校長先生なので、長年の経験から、学校で必要なICT教材についてよく分かっています。そこで、例えば、教卓で先生が端末に質問を書くと、すぐに子どもたちが自分の端末で回答できるようなアプリ、先生がその場で問題を作り、子どもたちは自分の端末でその問題を見て、学習できるアプリ、SNSなどのネットワークを活用するビジュアルプログラミング言語の開発など、そのまま市販できるような素晴らしい教材開発をされました。この研究に感銘を受けたのは、その利用者数です。ビジュアルプログラミング言語の登録者数は25万人、質問回答するアプリは2.2万人という、信じられないような利用者数なのです。本当に現場に役立つ教材開発をされたことを、高く評価いたしました。

今年の論文の内容に、私は大変うれしく思い、この教育界には、隠れた素晴らしい才能を持った先生方が大勢おられるということに、どこか安心感を覚えました。

受賞された先生方、本当におめでとうございます。

審査委員

武内　清

武内清と申します。専攻は教育社会学で、その観点から講評させていただきます。

学校教育の内容や方法は学校の中だけで完結するのではなく、その時々の教育政策や地域の状況、保護者の要望、児童生徒の特質などの影響も受けます。また逆に学校外のそれらにも影響を与えます。優れた教育実践は、そのような学校と学校外との相互の関係を意識した社会的なものであることが多いと思います。

今回受賞された３編の教育実践に関して、紹介させていただきます。この３編は、少子化や教員の多忙化時代の学校と地域社会との関係を意識した教育実践です。

中学校部門で最優秀賞を受賞された岡山市立福浜中学校の藤枝茂雄先生の「部活動の組織と運営の改善に向けた実践的考察」は、教員の多忙化の元凶となっている中学校の部活動運営に対して、直面する課題を明確に整理し、その解決策を練り、校長の強いリーダーシップで、PTAの協力を得ながら実行した優れた実践報告です。部活動の「社会的文化的要因の分析」を理論的にして、「総時間枠内裁量担当制」「保護者参画による組織的部活動運営」という斬新な方法を用い、部活動の組織と運営の改善をはかった実践です。それは説得力があり、全国の学校の模範となる実践です。

同じく中学校部門で優秀賞を受賞した上越教育大学附属中学校の仙田健一先生の「身近な地

域の魅力に気付き、誇りをもつ生徒を育成する社会科授業」は、歴史研究の課程を生徒にも追体験させる優れた実践授業です。郷土の歴史を、本やインターネットで調べるだけでなく、生徒が現地でフィールドワークをして、一次資料を自ら探すまでして、歴史研究の手法を学ばせています。授業の実施前と後での生徒の地域意識の変容が、具体的に示されています。理論と方法がしっかりしていて、地域の歴史を生徒に学ばせるモデルとなる汎用性のある優れた実践です。

小学校部門で奨励賞を獲得した香川県高松市立鶴尾小学校の田中義人先生の「閉校が議論された小学校の挑戦『地域と協働する　攻める教育』」は、人口減少、児童の減少で閉校が議論される学校で、お便り交換、教育活動の情報発信、ふるさとの偉人賞、ｅラーニングなど、学校の実践を積極的に地域社会に発信し、地域社会からの資金援助も得て、地域と連携した「攻める教育」を実践した報告です。人口減少で学校閉校や統合などが検討されている地区のモデルになるものだと思います。

以上のように３編とも、現代の学校のかかえる問題を、地域社会や保護者との関係や連携で改革しようとした優れた教育実践で、全国のモデルになるものです。

受賞を心からお祝い申し上げます。

審査委員

露木 昌仙

受賞された先生方、誠におめでとうございます。論文の審査に関わらせていただいた露木昌仙と申します。私からは全体の感想と四つの論文の紹介をさせていただきます。

令和３年１月に中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」が公表され、学校現場では、そのグランドデザインに基づいて、新たな教育への挑戦を開始しています。これまでの日本型学校教育のよさを継承しつつ、全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学び、協働的な学びの実現を果たそうというものです。今回応募していただいた論文の多くが、この点に関わる課題を捉え、解決しようと実践等に臨まれていることは何より素晴らしいことと感じました。

さて、最初は小学校で「優秀賞」を獲得された広島県竹原市立忠海学園の有松浩司先生の「困難に立ち向い、乗り越えようとする力の育成」を紹介します。この実践は小学２年生の子どもたちが野菜づくりに挑戦する生活科単元です。野菜を育てる過程で様々に生じる問題を子どもたちに自力解決させたいという先生の熱い思いが大変よく見えます。そのための「しかけ」がたくさん設定されています。子どもたちを困難に出合わせ、解決策を考え、実践させる。結果について振り返りをさせ、新たに立ち向かわせる。これを繰り返させ、乗り越える力を高めようというも

のです。子どもたちが生き生きと活動している姿が見えてくるようでした。本当の教師の支援は何かを考えさせる実践となっています。

次に小学校で「奨励賞」を獲得された香川県高松市立鶴尾小学校の田中義人先生の「閉校が議論された小学校の挑戦『地域と協働する　攻める教育』」を紹介します。市の校区審議会で閉校議論がなされ、結果として学校が存続した理由は「地域のコミュニティや文化の中心としての機能が大きい」ということだったそうです。そこで地域コミュニティ文化の機能の拡充を目指した学校づくりに挑戦しています。

コロナ禍で臨時休校となっている中、週１回、手紙のポスティングや葉書の返信で家庭とコミュニケーションをとる。それを友達や祖父母とのメッセージ交換に広げる。新聞、テレビ等のマスメディアも活用し学校の実践、学校運営協議会が行った「子ども朝食堂」の実践（これは文部科学大臣賞を受賞しています）等を発信したことにより、保護者や地域住民の校区に対する誇りが高まったことが読み取れます。さらに地域の偉人である観賢僧正を取り込み、岡山大学と連携したeラーニングを進め、校区を愛する子どもが育ち、ふるさとが活性化している様子が分かりました。

三つ目に中学校で「最優秀賞」を獲得された岡山市立福浜中学校の藤枝茂雄先生の「部活動の組織と運営の改善に向けた実践的考察」について紹介します。いま、中学校においては働き方改革とも関わり、部活指導の在り方が大きな課題となっています。この課題を正面から改善しようとした実践です。問題の所在を「教育現場の社会的文化的風土」にあるとしています。部活動には、教員の勤務時間の増加の問題だけでなく、外部指導者の任免手続き、部費の徴収など問題がいくつもあると指摘しています。これら多くの問題点を情報公開しつつ、PTA会長と連携し１年間をかけ検討委員会で課題を洗い出し、PTA会長をトップとする新たな部活動運営委員会を作り上げました。現場だからできる、鋭い切り口を高く評価いたしました。

最後に中学校で「奨励賞」を獲得された愛知県豊橋市立豊城中学校の城所美和先生の「多様な性　～あなたのままで大丈夫～」を紹介します。養護教諭として生徒から性についての相談を受けたり、性に関わる場面に出合ったりしました。その経験の中から、生徒への指導、教員への啓発が必要であると強く感じ、本実践に取り組んでいます。保健室の性の指導に関わる環境整備はもちろん、授業を通して「多様な性について」等を指導し、生徒の変容をもたらしています。また、教職員に対する啓発のため情報提供に努め、教職員の意識も変化させたことは優れています。報告の中で、授業のねらいや内容を、授業計画として明確に示すとさらに分かりやすい研究実践となったと感じました。

以上で、私からの所感といたします。ありがとうございました。

審査委員
鳥飼 玖美子

今回の最終審査を通して感じたのは、学校経営に関する力作が多かったことでした。中学校部門では、最優秀賞を受賞した岡山市立福浜中

学校の藤枝茂雄先生による「部活動の組織と運営の改善に向けた実践的考察」があり、小学校部門では、優秀賞を受賞した熊本市立植木小学校の清田浩文先生による「言葉を大切にし、自他を大切にする学校づくり」がありました。小学校教育においては国語教育が全ての教科を横断する基礎になりますが、清田論文では思考と表現の基盤となる「言葉」を大切にする児童を育て、それにより自分も他者も大切にする資質を涵養するために、全学年で多様な試みを実践しました。多くの小学校で参考にすることが可能な取り組みです。

英語教育については、残念ながら応募が少数でした。コロナ禍のもとで新学習指導要領の内容を咀嚼し実践するのに苦労している現状では仕方ないかもしれません。そのような中、小学校部門奨励賞の茨城県牛久市立中根小学校の佐野一葉先生は、「外国語科における話す意欲を高める方略的能力の育成」と題する論考において、「コミュニケーション能力」の4要素（文法的能力・ディスコース能力・社会言語的能力・方略的能力）のうち「方略的能力」（strategic competence）に着目して「意欲喚起」に繋げる試みを実践しました。ただし、相手とのやり取りを円滑にするためとして児童に対して指導したMagic Word（魔法の言葉）の中には、方略を超えて「社会言語的能力」の域に入り実際の使用がコンテクストに大きく左右される語句もあり、「方略」（ストラテジー）との区分が曖昧なように感じました。

また、外国語教育において学習者の誤りをいつどのように訂正するかは難しい問題ですが、この取り組みでは児童が間違った英語を発話した際に、ただ放置していたようなのが気になりました。英語として完全な誤りの場合は、初歩の段階であっても、何でもよいから話せばよいと放っておくのではなく、発話した児童に対してだけ注意するのでもなく、全体に対して上手に正しい英語を提示するなどの工夫が必要ではないでしょうか。

なお、せっかく「方略的能力」を焦点にしたのですから、日本語での紀要論文1本だけに頼るのではなく、Canale, Michael（1983）をきちんと読んで「社会言語的能力」との違いを理解していただきたいし、「意欲喚起」について教育学や心理学の論文も参照していただきたいと思いました。今後の研鑽に期待します。

言葉に関する指導でユニークな視点からの取り組みを実践したのは、小学校部門奨励賞の北海道室蘭聾学校の髙津直人先生でした。「聾学校における言葉の育みを目指した掲示活動の取り組み」は、聴覚からの情報制限がある児童に対し、掲示物の活用により興味を抱かせ深い学びへと発展させ得る可能性を示していました。

ウクライナ戦争について手話で「ウクライナ悪い」としか表現しなかった6年生がいたため、ロシアによるウクライナ侵攻について動画や新聞を用いて両国の歴史から丁寧に説明したところ、児童たちは「もっと教えて欲しい」と興味を示し、やがてウクライナの人々の心情や、ロシアがなぜ侵攻したのかという理由にまで関心の対象が広がっていった様子が報告されていました。「ウクライナ悪い」としか言わなかった6年生は中学校に進学後、ロシアとウクライナの関係から世界情勢に関心を広げたことなど、「言葉の種が花を咲かせた」実例を示した実践論文でした。

本論文により聴覚障害のある児童や生徒についての理解が深まることを願っています。

審査委員

東原 義訓

受賞された先生方、おめでとうございます。

今回のICT関係の投稿論文は、昨年度よりさらに質の向上が感じられました。その背景には、文部科学省の進めるGIGAスクール構想があるのだと思われます。そのような中で、今回受賞されましたICT関係の論文は３点ありました。

小学校部門で優秀賞に輝かれた和歌山大学教育学部附属小学校の北川真里菜先生は、音楽教育における個別最適な学びの手段の一つとして、ICTを活用されたというものでした。

学習の個性化では、子ども自身がその内容や方法を選択することに特徴が見られます。しかし、子どもに選択を任せれば最適な学びになるのかと言えば、そうとは限らないケースがあるわけです。北川先生は、そこに配慮された指導を見事に展開されました。

具体的には、曲づくりの課題で、楽器を使うのか、プログラミングによるのか、楽譜制作ソフトを使うのか、児童に選択させたのですが、曲づくりの過程で指導をなさったことにより、児童は途中で、より最適な手段に変更することができ、結果として曲が完成したというものです。ICTを活用した個別最適な学びの指導の勘所を示した点が高く評価されます。

中学校部門で優秀賞を受賞された岩手県一関市立花泉中学校の奥田昌夫先生は、GIGAスクール時代に相応しく、どこでも活用でき、異なるOSでも利用可能なように、Webブラウザ上で稼働する教育用デジタルツールを開発し、無償で広く全国に提供されました。

たとえば、一人１台の端末と大型提示装置を組み合わせて情報共有できる「伝思黒板」は、一斉授業の在り方を改善しました。また、生徒自らがSNS環境やネットショッピング環境を構築できるように、技術科で必須の双方向性のあるプログラムを作成できる環境を開発して提供されています。

これらは、全国に公開されており、「タイムシフトカメラ」は25万回、双方向性プログラミング環境は12万回を超えるアクセス数を数えます。

デジタルツールを開発して提供することにより、顔を見たこともない児童生徒の学びにも大いに役立つというデジタル時代の新たな教育実践の在り方を示すものとして注目される論文でした。

ICT関連で奨励賞を受賞されたのは、小学校部門の和歌山県有田川町立鳥屋城小学校の坂本利文先生でした。有田みかんの生産地である山間地特有の学校の課題解決のために、町内の学校の先生方が、オンラインで集う仕組みを構築されて、様々な活動に取り組んでいらっしゃいます。

町内全教職員共有フォルダにより、学校を超えて資料の閲覧が可能となりました。段取りが参考にでき、労力が軽減し、新たな発想に役立ったと言われています。校内に同じ学年の教員がいない先生にとって、オンライン学年部会は、互いに頼りにできたり、現状に満足することなく、刺激し合ったりすることに役立っているそうです。その他、オンラインミニ講座、授業に役立つミニ動画などの試みが報告されています。

町内の複数の学校が、あたかも一つの学校であるかのように感じさせてくれるオンラインの仕組みは、人口減少時代の、新たな教育委員会や学校の在り方に大きな示唆を与える教育実践と言えるでしょう。

以上、受賞された三つの論文について触れさせていただきました。

来年も、様々な問題解決のために、ICTがどの

ように役立ったのかを示す論文が、数多く投稿されることを期待したいと思います。

審査委員
藤井 斉亮

審査員の藤井斉亮です。

まず、全体的な印象を述べます。

今年は、一昨年・昨年と異なり、学校教育現場では、コロナ対策が日常化され、まさに、ウイズコロナの時代に入ったという印象を持ちました。実際、今年の論文のタイトルには「コロナ」は出てきません。日々の実践では、コロナ対策としてそれなりのご苦労もあると思いますが、それをあえて口にしない日本の先生方の粘り強さと賢明さを論文から感じ取ることができました。

さて、私のほうからは三つの論文について講評と感想を述べます。

まず、小学校の部で優秀賞を受賞された広島県竹原市立忠海学園・有松浩司先生の「困難に立ち向い、乗り越えようとする力の育成」についてです。

具体的には小学校２年生の生活科で「大きく育て　わたしの野さい」という単元名で展開された全27時間の実践です。野菜を育てるという活動は、種々の段取りを教師の側で行い、子どもたちはその敷かれたレールに沿って活動するというのがふつうでしょう。ですが、この実践は、育てる野菜の種類を決めるのも、野菜を育てる場所を決めるのも、そしてその場所を畑として使うことの許可を得るのも子どもたち自身で行っています。単元を通して、子どもたちは全部で五つの困難といいますか解決しなければならない問題に直面します。四つ目の困難はカラスによって野菜が食い荒らされる被害です。これはおそらく教師としても想定外だったでしょう。子どもたちは、かかしを作ることやネットを張ることを考えます。ここで、教師から五つ目の困難として、その材料をどう調達するかが投げかけられます。子どもたちは、学校運営協議会でプレゼンテーションし、必要な支援をお願いし、材料や予算を獲得します。このように子どもたちは、想定外のものも含め、様々の困難に出合い、それを克服していきます。子どもたちが得た達成感・満足感は、さぞや大きかったであろうと思います。「困難に立ち向い、乗り越えようとする力」を「野菜づくり」という具体的な活動を通して育んでいる実践です。決して奇をてらった実践ではなく、改めて見直すと、自然で正当な教育実践と言えますが、教師が「伴走者」としての役割を的確に果たしており、また、実践の成果が素直にかつ明確に記述されていることで、高く評価されました。

次は、小学校の部で奨励賞を獲得した、北海道室蘭聾学校・髙津直人先生の「聾学校における言葉の育みを目指した掲示活動の取り組み」です。この学校は、幼稚部・小学部・中学部からなる幼児児童生徒20名の聾学校です。実践の内容は、掲示物を活用して、子どもと人とのコミュニケーションの充実、言葉の獲得とその活用を意図したものです。４月から10月までの半年間の実践ですが、掲示活動を三段階に分け、また、個々の掲示物について、その都度、子どもたちが掲示物にどのように関わったかを丁寧に見取って評価し、次の掲示物の工夫へとつなげています。このように一つ一つの活動ごとに、その教育的価値を明確にして次の実践に活かしている点が高く評価されました。

一人１台端末の時代なので「時代の逆をいくのかもしれない」と論文の中に書かれていますが、

こういう時代だからこそ、素朴で手づくり感満載の掲示物が、子どもたちの興味・関心・意欲を高めたとも言えます。この論文は、私たちに改めて学習環境の重要性を再確認させてくれました。

もう一つの奨励賞は、岡山大学教育学部附属中学校・川上祥子先生の「持続可能な社会の構築を目指す『サルベージ・パーティ®』の実践」です。

教科は家庭科で、２年生と３年生の間の春休みに出したパフォーマンス課題による実践です。その課題は、自分といとこ、そして祖母の家の３軒から持ち寄ったとされる食材リストが提示され、それに自由に１品加えたうえで、３品以上の料理を作り、料理名・献立・材料・作り方をレポートにまとめるというものです。サルベージとは「救い出す」という意味で、SDGsでも謳われている食品ロスを減らす活動の一環となっています。生徒の感想には態度変容が明確に表れていて、実践の成果を確認することができます。また、この取り組みを再度自主的に実践した生徒が46％と半数近くいるなど、本実践が家庭で共有され、活かされており、この点においても高く評価されました。

以上、全体の印象と、優秀賞を受賞された論文一つ、奨励賞を受賞された二つの論文について所感を述べました。ご紹介した三つの実践は、それぞれの教科・領域等において、全国の模範となる実践・研究であると思います。

この度の受賞、誠におめでとうございました。

審査委員

松岡 敬明

この度、東書教育賞の論文審査に当たらせていただきました松岡敬明と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは、今般受賞された皆様、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。日々のご多用な教育活動の中で実践研究を続けられ、それを論文にまとめられたご努力に対して敬意を表します。

私からは、小学校部門において最優秀賞を受賞された岡山市立芳明小学校の中安翼先生、優秀賞を受賞された熊本市立植木小学校の清田浩文先生、そして中学校部門において奨励賞を受賞された愛知県豊橋市立豊城中学校の城所美和先生の論文に触れながら、お話しさせていただきたいと存じます。

中安先生は、「性別・技能・言語の壁を越えろ！　パラスポーツを活用した体育授業」という論題で研究を進められました。ボッチャやゴールボールといったパラスポーツを小学校体育の学習内容に合うように工夫して取り入れた実践研究です。学習指導要領を踏まえ、理論的に実践を進め、学校全体の指導計画に沿うよう年間指導計画に位置づけています。実践に向けて、「体育科の学習内容としての位置づけの明確化」、「運動機会や交流機会の確保」、「用具、場の確保」という三つの課題を見事に克服しています。これだけでも十分に実践研究になるレベルのものだと

思います。児童のアンケート結果から考察を進めていますが、「おもしろかったかどうか」という調査項目に加え「チームとしてどのような工夫をしたのか」や「どのような話し合いをしたのか」なども問うと、より詳細な分析ができるものと思います。今後も、さらに本実践を継続され研究を深めていただくことを期待いたします。

続いて清田先生の研究についてお話しいたします。清田先生は、「言葉を大切にし、自他を大切にする学校づくり」という論題で研究を進められました。読書指導と話し合い活動によってコミュニケーション能力を高めたり活性化させたりすることによって、自他を大切にする子どもが育つはずだという仮説を立て、それを検証すべくいくつかの実践を行った研究です。一見、国語教育の研究のような印象を受けますが、清田先生は校長職ですので、実は学校経営という視点からの研究となっています。一部の活動においては、保護者の方々の協力を得るなどの工夫もして研究及び経営をされてきたことが、明確に述べられています。研究推進の結果、子どもたちの表現力や語彙量が向上したかどうか、またそれらが児童の自己肯定感や他者を尊重する態度の向上につながったのかということについては、掲載されているデータからだけで結論を導くことは難しく、また時間もかかるものと思われます。今後とも学校全体での取組を継続され、ある程度長いスパンで効果検証をされていくことが望まれます。

最後に城所先生の研究についてお話しいたします。城所先生は養護教諭という立場から、「多様な性　～あなたのままで大丈夫～」という論題で研究を進められました。性同一性障害に係る子どもへの対応という視点から、教職員及び生徒たちの人権意識を高めるための実践研究となっています。性に関する相談で保健室を訪れる生徒の実態等を踏まえ、養護教諭という立場で、教員研修から生徒指導まで行い、大変意欲的かつ活動的であるとの印象を持ちました。特にこの３年間、養護教諭は学校におけるコロナ対応に忙殺される日々が続いていると思いますが、そのような中にあって本研究を推進してこられたことは大変立派です。一方、教員研修や指導計画について、管理職はじめ学校組織がどのように関わったのかが判然としません。その点についても記述されると、他校においても実践しやすくなるのではないかと思いました。

以上、簡単ではありますが私の講評とさせていただきます。